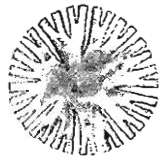


長一調一・一短二調

欧州学会巡業どさまわりの記



稲賀 繁美

(国際日本文化研究センター助教授)

久方ぶりに日本を離れてそろそろ二カ月を越した。日本のことを全て忘れられれば幸いなかもしれないが、こうして寄稿依頼に応えているようでは、それもおぼつくまい。

八月二二日から二八日にはブラハで中国のモダニズムという小さな学会。日本からの参加者がほかにないというので、門外漢なのに参上。中国二〇年代における表現主義受容と東洋美学への回帰にかんして一席。東アジアモダニズム検証を国際的に企画するのは、まだ今から先の課題らしい。カレル橋を毎日のように時刻を変えては横断し、市内中央にある時計台の鐘楼にもお上りさんの義務として昇ってみた。エクスカージョンの目的は、ユネスコ地球遺産に指定のクルムロフ。若き日のエゴン・シーレが恋人と滞在してスキャンダルを起こしたりもした土地に、今や立派な美術館がある。途中通過したバドワイザーは米国の垂流と目下ハーグ国際司法裁判所で係争中のビールの原産地。おりからの収穫祭。九月一日から五日はスロヴェニアの首都リュブリアナで国際美学会。オーストリアの

南、アドリア海はトリエステの東にまで広がる新國、といえは場所もお分かりだろうか。風土も雰囲気もドイツ語の通じる南スイスとでもいいうべき趣。小さな首都あげての喝采ぶりでもてなしには感心。都市というものの、あるべき規模と機能を再確認。交通の要所がまた歴史の激動に翻弄された場所だったことも納得。あまりに優しい交通道徳に驚嘆。九月五日から八日はコペンハーゲンで近代日本文学に関する国際学会。日本作家の西洋憧憬と日本回帰という系譜を辿る。会場はコペンハーゲン大学本部の由緒ある歴史的建造物。予算不足ものかは、最終日にはチボリ公園のヘルツェゴビナ食堂という奮発。会議後のセミナーでも『ナウシカ』やら『アキラ』といった日本のアニメに関するセミナーに飛び入りではしゃぐ。ホストの長島要一、黒幕の鶴田欣也の連携プレイも見事な企画。ニュー・ヨークにおちつく暇もあらはこそ、今度は一〇月二四日とハーヴァードのライシャワー・インスティテュートで講演。ホストはジョン・ローゼンフィールド教授。小規模ながら入江昭夫妻、ハワード・

丸

ヒピット夫妻、レオ欧州リー、ジェイ・ルービン教授などのご臨席を賜り、まずまず。講演前にホストが先代の館長を勤めたフォッグ美術館の地下にある図書館と資料室、それに最上階の修復室を見学。圧倒的な設備に卒倒寸前。十月十二日から十五日は再び欧州にわたり、ベルギーはルーヴァンにて日欧学会。文化の翻訳というのが中心課題。当方の発題は一八世紀徳川日本における西洋わたりの透視図法の日本の咀嚼の理論的反省。ブランバンドの中心地たる歴史都市の厚みを堪能。世俗女子修道院とでも称すべきベギナージュを大学が再利用して賓客の宿舎としているのも見事。日本からの参加者はやれムール貝に現を抜かし、每晚バーでジュニーヴァと称するシユナツプスに浸り、無数のビールに沈潜し、ドドネウス生地、アントワープ旧市街まで放浪した。

つづくはバリの日本文化会館にてセミナー（十五日から十七日）。おりからの「縄文」展は日本では実現不可能な高品質。江戸・徳川文明の再評価に加えて、フランス若手の日本学者の現状報告と最新情報を入力。当方は直接の徳川研究ではなく、百年前のフランス人がいかに北斎を評価したかに関する報告という、いわば鮫に集るコバンザメに群がるコバンイタダキのような話題提供。充実した日程に続く最後の晩餐は、磯村尚徳氏の主催。その翌日はチューリッヒの東アジ

ア・ゼミナールの学会（十八日―二十日）。二十一三十年代日本の都市文化再考。モガ・モボの充実した展覽会が鎌倉の神奈川県立近代美術館で催されたのも今年の成果だった。植民地経営の反省から妖怪ブームまで、縦横の議論。本場でのチーズ・フォンデュには北米からの参加者が参っていたりして愉快。ワイシの値段が高いのがスイスの困るところとか。クススト・ハウスでの「ベックリンのバリ」展は見物。続いて翌日から今度はジュネーヴ大学日本語科に招かれての講演会（二一―二二日）。鈴木貞美氏が、近著に依拠しつつ、近代日本における文学概念の再検討。当方はファン・ゴッホの近代日本と中国における受容と変容の概要を、スライド二台併用のうえ即興の下手なフランス語でおしゃべりして、一席を濁すのみ。とまれチューリッヒからジュネーヴへの列車の車窓からは一面の葡萄畑の紅葉を満喫。半世紀以上前に横光利一が抱いた『旅愁』追体験。

二日の休暇を利用して訪れたマルティニーでは、折からピエール・ジャナダ基金で充実したゴーギャン展。これだけの個人蔵作品を一度に見る機会はおそらくもう一生ないだろう。その夜はここからさらにアルプスの山麓に分け入ってトリアの谷、リヴィア・モネ夫妻の両親の家に招かれる。一夜の嵐が過ぎた翌朝、快晴、紅葉の森を抜けて氷河の麓まで散策する。